

子ども社会研究の可能性

－仲間集団研究の立場から－

住 田 正 樹 (九州大学)

子どもの仲間集団は、家族集団や学校集団とともに人間の発達にとって重要な意味をもった基本的な集団だとされている。とくに仲間との集団行動を好むギャング・エイジと呼ばれる児童期の仲間集団は、集団凝集性が高く、それだけに発達に及ぼす影響は大きい。実際、子どもの発達を論じた社会学、心理学、教育学の文献には必ず仲間集団の項が当てられ、その重要性が指摘されている（心理学の場合は仲間関係として）。にもかかわらず子どもの仲間集団の研究は乏しく、子どもに関する他の研究諸領域に比すると、著しく立ち遅れている。それは1つには子どもの発達の社会的過程における仲間集団の意味が、家族集団や学校集団におけるほどに明確ではなく、具体性に乏しいからであり、2つには仲間集団の調査が極めて困難だからである。そもそも調査対象としての具体的な子どもの仲間集団を捉えること自体が容易ではない。では子どもの仲間集団研究の可能性はどうか。しかし子どもの仲間集団こそが実は「子ども社会」そのものではなかったか。

1. 児童期の発達課題と仲間集団－子どもの仲間集団研究の意義－

子どもの仲間集団研究の可能性を論じるには、何よりも子どもの発達の社会的過程、すなわち社会化過程における仲間集団の意味を明確にしなければならない。

人間の発達の過程を最も体系的に考察した精神医学者のサリヴァン（Sullivan,H.S.）は、児童期を社会化の修正の時期と捉えている。それまでの主要な社会化機関である家族集団には偏りや限界があり、したがってそこでの社会化には文化的な歪みや価値の偏りがあるから児童期はそれを修正しなければならない時期だとする（サリヴァン 訳書 p.256）。そうでないと児童期以後の発達段階のコースは歪曲されてしまうという。

では、社会化の修正はどのようにして行われるのか。それは子どもと日常的に接触する家族集団の成員以外の人々、すなわち他人との直接的接触を通してである。他人は、当の子どもや家族集団の成員とは異なった個性と経歴を有し、異なったパースペクティブを有している。しかも当の子どもに対して庇護的な立場にはない。だから他人との関係のなかでは常に対立・葛藤が生じるが、その対立・葛藤を調節し解決していく過程で子どもは自己の判断のうちに他人のパースペクティブを取り入れていくのである。この過程が社会化の修正である。子どもの自己中心性が克服される漸進的過程であり、思考の客観性の獲得過程であるといつてよい。

子どもにとって他人は同世代の子どもと異世代の大人とに大別される。異世代の他人の大人は親（家族員）とは異なる権威をもった人々－近隣の大人や学校の教師たち－であり、こうした他人の大人は子どもに対する見方も関心のもち方も親とは異なり、また権威の行使の仕方も異なる（勿論、近隣の大人と学校の教師の間でもそれぞれに異なる）。だから子どもはこうした権威者との直接的接触によって権威に対する服従という形をとりつつ社会化の修正を行っていく。

これに対して同世代の他人というのは子どもの仲間のことである。同世代であるから知識・技能・能力に関して対等な、相似た段階にある。こうした同世代の仲間が集団的遊戯活動に対する興味・関心・欲求を契機に寄り集まって形成するのが仲間集団である。だが仲間は既にそれぞれの個性と経歴を有する家族集団のなかで社会化されており、それぞれのパースペクティブを形成しているから集団的遊戯活動を展開していく過程においても各自が自己の欲求を押し通そうとし、あるいはそのために他の仲間の欲求を妨害しようとして対立・葛藤が生じるのである。この仲間同士の関係は相互に対等な立場にある他人同士の関係であるからシビアである。その意味で子どもの仲間集団は元々内部に葛藤集団的要素を含んでいるといつてよい。だが、そうした対立・葛藤を仲間は互いに折り合いをつけつつ相互の許容範囲に治まるように解決していく。そうでなければ仲間と集団的遊戯活動を継続していくことができない。こうした対立・葛藤の調節や解決が可能なのは子どもたちの集団的遊戯活動に対する欲求が強く、かつ仲間との関係が対等だからである。つまり子どもは仲間集団のなかで妥協という形をとりつつ社会化の修正を行っていくのだ。サリヴァンは児童期の重要な社会化は競争(competition) (ここでいう対立・葛藤) と妥協(compromise)だと述べているが(サリヴァン pp.260-261)、それは正に仲間集団経験を通してこそ可能なのである。仲間との集団的遊戯活動を展開していく過程で子どもは競争と妥協を経験する。この、仲間との集団的遊戯活動を最も好む時期こそがギャング・エイジの児童期なのである。

子どもの仲間集団は集団的遊戯活動を基盤にして形成されるから、その限りにおいて子ども同士の関係の如何は問題とならない。たとえ相互に否定的な関係にある子ども同士であっても集団的遊戯活動に対する欲求が強ければ同一の仲間集団を形成して遊戯活動に興じる(住田 pp.117-151)。仲間集団は、一般的には、親密な関係を結合の契機としたインフォーマルな小集団だと規定されているが、子どもの仲間集団に関する限り、親密な関係によって形成されるとは限らない(後述)。子どもの仲間集団のなかには肯定から否定(対立・葛藤)に至るさまざまな対人関係が存在するのだ。その意味で子どもの仲間集団は正に子どもの社会を成しているのである。

こういうわけで児童期における社会化の修正(それ自身が社会化であるが)とは、仲間集団のなかでの競争と妥協という相互作用経験を通しての対人関係能力の形成、つまり仲間のパースペクティブを考慮できるような思考の客観性の獲得と、そしてそうした相互作用過程において生じる自己統制や自己意識の変容を通して形成されていく自己同一性の獲得のことなのである。したがって仲間集団経験がないままにギャング・エイジの児童期を通過してしまうと、対人関係能力と自己同一性を獲得しないままに次の発達段階に入り、ために青年期においてさまざまな発達障害が生じるのだ。不登校、家庭内暴力、引きこもり、孤立・孤独、コミュニケーション不全など。児童期の社会化障害の問題は児童期に現れるのではない。次の発達段階である青年期になって現出するのである。

2. 子どもの仲間集団研究の問題

しかし子どもの仲間集団の研究は乏しく、立ち遅れている。その理由には理論的次元の問題と経験的次元の問題がある。但し両者が相互に関連していることはいうまでもない。

2. 1. 子どもの仲間集団の概念規定—理論的次元の問題—

仲間集団は、一般的には、何らかの個人的属性や特性の類似性に基づいて形成される親密で対等な、インフォーマルな小集団だと規定されている。もちろん仲間集団といっても子どもの集団だけではなく、成人の集団も含むから、一般的に規定すれば、このようになるだろう。しかしプラスチックな時期にあって、未だ確固とした自己を確立していない児童期の子どもの仲間集団と、既に自己を確立し、自立的な生活能力を有する成人の仲間集団とでは構成・性格・機能が著しく異なり、したがって社会化過程における意味も異なる。いうまでもなく子どもの仲間集団の、社会化過程における重要性は成人の仲間集団の比ではない。だから同じ仲間集団とはいっても同列に論じることはできない。

そうとすれば、子どもの仲間集団を考察していくには、このような概念規定では十分とはいえない。子どもの社会化過程において仲間集団が重要だとすれば、その重要性を具体的に示す仲間集団固有の、あるいは特徴的な社会化機能とその内容が明確にされなければならないし、さらにそうした社会化機能を結果せしめる仲間集団の構成や構造が解明されなければならない。そうした子どもの仲間集団に固有の構造と機能の様態こそが本質的な構成要素として、その概念規定のなかに取り入れられねばならない。そうでなければ子どもの発達の社会的過程のなかに関係を明確に位置づけ、その意味を理解することができない。例えば、先に述べたように、子どもの仲間集団に関する限り、親密な関係という規定内容は妥当しない。このことが成人の仲間集団と大きく異なるところである。同じ仲間集団といっても、子どもの仲間集団は本質的には遊戯集団であるが、成人の仲間集団は社交集団であるからだ。

研究の初期段階では概念規定が十分でなくても、否、ときには経験的対象のない概念規定さえ、有用なこともあるが、しかしその概念規定は継続的な調査研究によって漸次明確化・厳密化されていかなければならない。だが、子どもの仲間集団は自然発生的でインフォーマルな小集団であるから、その存在を確認することが容易でない（後述）。そのため科学的研究の基礎的作業である事象の観察さえ容易でなく、ために帰納的に概念を規定し、さらに再規定するという修正作業も一向に進まないのである。概念は理論を構成する要素である。

2. 2. 子どもの仲間集団調査の困難—経験的次元の問題—

子どもの仲間集団の研究が乏しいのは偏に調査方法の困難にあるといっても過言ではない。これには2つの問題がある。

1つは、先にも述べたように、子どもの仲間集団を具体的に捉えることが困難なことである。家族集団や学校集団は集団活動のための一定の場所、一定の施設空間があり、その物理的範囲が集団の境界を成しているから集団の把握は容易である。しかし子どもの仲間集団は子どもたちの集団的遊戯活動に対する興味・関心・欲求の都度に形成される自然発生的でインフォーマルな小集団であるから随意的であり、集団形成の場も集団活動の場も一定ではなく、またメンバーである仲間も常に同一とは限らず、流動的である。だから具体的に子どもの仲間集団を捉えることが容易ではないのである。分析の対象が仲間集団の外枠・形態といった外部構造であれば質問紙法によっても可能だが、集団内のメンバー間の対人関係の諸様式・パターンといった内部構造の分析であれば、具体的な特定の仲

間集団を対象とした事例分析にならざるを得ない。だが、取り分け児童期の仲間集団は、活動範囲の未だ広くない幼児期の遊び仲間やメンバーが固定的な青年期の仲間集団に比して、集団活動の範囲は広く、メンバーは流動的であるから、仲間集団の存在を把握することさえ容易ではない。

そのために従来はソシオメトリック・テストが用いられてきた。例えば、学校から帰宅後に遊んだ相手、親密な友だち、仲よしグループのメンバーなどについての記述を求め、その回答をマトリックスの形で集計したり、ソシオグラムを描いて相互選択の範囲を見出し、その範囲を仲間集団の境界と捉えてきたのである。しかしこの方法は明らかに間違っている。ソシオメトリック・テストは本来集団の内部構造を測定する方法であって集団の境界を捉えることはできない（住田 pp.33-71）。例えば、選択関係のない子どもは集団から外れた孤立児として位置づけられるが、しかし子どもの仲間集団であっても、その内部は構造化されているから下位に位置するメンバーのなかには、帰属意識はあるものの、如何なる選択基準においても選択関係の範囲には入らず、孤立児の形をとることがある。また先に述べたように、子どもの仲間集団は子ども同士の親密な関係によってのみ形成されるわけではなく、相互に否定的であっても同一の仲間集団を形成する。だからソシオメトリック・テストでは仲間集団を捉えることはできないのだ。そしてさらにいえば、心理学領域では仲間関係についての調査・実験・研究が数多くあるが、しかし仲間関係についての心理学的研究結果がそのまま現実の仲間集団の事実と妥当するとは限らない。

もう1つの問題は、仲間集団のなかでの子どもの社会化を証明することが困難だということである。社会化の証明の問題は何も仲間集団に限ったことではない。一般に子どもの社会化は長期にわたる過程であり、かつ可視的な事象ではないから証明すること自体が困難である。だが、家族集団や学校集団においては、主要には親や教師という大人の権威者に服従するという形での社会化であるから、そこでの社会化は、その効果の測定可能性はさておいて、権威者の要求に沿った内容と方向を示した明確な事実として考察していくことができる。しかし子どもの仲間集団の場合は、仲間との妥協、あるいは仲間のパースペクティブを理解し学習するという形での社会化であり、また集団的遊戯活動に参加するという形での社会化、すなわち「一般化された他者」（集団行動の原理）の形成という形での社会化であるから、その社会化の内容と方向は、限定的ではなく、融通性があり、したがって明確に考察することができない。妥協とか「一般化された他者」の形成といった形での社会化は自己意識の変容、あるいは自己観念の変容として結果するが、それは個人内の主観的な内的体験としてしか表れないから具体的に考察していくことは容易ではない。さらに仲間集団の社会化効果としての主観的な内的体験といっても、実際には家族集団や学校集団のなかでの社会化の様式と相互に影響しあっているだろうし、またマスコミュニケーションの影響もあるだろう。だがそうした社会化効果を排除することは不可能である。

3. 子どもの仲間集団研究の課題と方法

われわれは子どもの仲間集団が社会化過程において重要な意味をもっていることを理論的に説明していくこともできるし、また事実として、さまざまな問題行動の実際例を通して、あるいは日常的に接する子どもたちの生活行動を通して経験的に知っている。だからその経験的事実を科学的に検証し、さらに研究を深化させていかなければならない。では

子どもの仲間集団研究にはどのような課題があり、またどのような方法で研究するのか。

子どもの仲間集団研究の課題は、差し当たって(a)仲間集団と個人との関係、(b)仲間集団と外部社会との関係という、いわば研究の内容に関する領域と、(c)研究方法の研究という、いわば研究の形式に関する領域の、3つに大別することができる。

(a)子どもの仲間集団と個人との関係とは、仲間集団の構造と機能の問題である。仲間集団の構造は、メンバー間の相互的な対人関係の反復持続の可能性の諸様式・型の集合を意味する内部構造と、そうした対人関係を条件づける集団の外枠・形態を意味する外部構造とに区分することができる。後者の外部構造とは集団の規模、メンバーの属性、集団形成の基盤等のことであり、前者の内部構造とはコミュニケーション構造、役割地位構造あるいは勢力構造、情緒構造、そしてこれらの相互関係のことである。この内部構造の分析過程で仲間集団の形成過程、集団の規範・価値・態度、リーダーの特性や構成メンバーの属性も明らかになるだろう。また仲間集団の機能には手段的機能、表出的機能あるいはメンバーに対する防衛的機能等があるが、とくに重要な機能は、これまで見てきたように、社会化機能である。子どもが仲間集団に参加・所属することによってどのように社会化されていくのか、その過程が実証的に解明されなければならない。この問題は、先に述べたように実際には他の集団による社会化と明確に区別することはできない。だが仲間集団の社会化効果を操作的に定義することによって、その一側面を測定することは可能だろう。そしてさらに操作的定義を模索し続けることによって社会化効果の測定可能性を切り開いていかなければならないだろう。そうした研究の一例が準拠集団理論の枠組にしたがって青年期の仲間集団を分析したシェリフ (Sherif, M) の研究である。シェリフは準拠集団理論の視点から仲間集団所属が青年の態度・行動に与える影響を分析した (シェリフ 訳書)。

(b)子どもの仲間集団と外部社会との関係とは、仲間集団と家族集団・学校集団、そして地域社会との関連の問題である。とくに重要な問題は、フォーマルな組織である学校集団のなかでのインフォーマルな子どもの仲間集団の形成過程・構造・機能に関わる問題である。この問題はそれ自体としては、(a)子どもの仲間集団と個人との関係の問題と同じであるが、しかしこの学校集団内での仲間集団の性格は社交集団化して、遊戯集団としての性格が薄らぐ。それは学校が厳格な秩序をもった組織集団であって、子どもはその一定の規律の下で行動しなければならないために、仲間集団の表出的機能の次元が重視されるからである。だから分析の視点はあくまでも学校というフォーマルな組織集団との関連におく。また学校集団の組織的活動の遂行に対する、いわゆる下位集団としての子どもの仲間集団の影響という問題もある。仲間集団が学級集団や教師の態度に影響を及ぼす場合も少なくない (長島 pp.240-290、田中 pp.226-279)。とくに反学校文化をもった逸脱的な仲間集団は学校集団の組織的活動を妨害さえする。さらにこの領域では子どもの仲間集団の背後にあって集団形成や集団行動の文脈的背景になっている地域社会との関連も問題となるし、子どもの仲間集団に対する家族 (親) の意識、態度、行動など家族集団との関連も問題となる。

(c)課題としての研究方法の問題とは、上記の(a)、(b)の課題を探求していくための研究や調査の方法の研究である。子どもの仲間集団の社会化機能を分析するためにはどのような方法が可能であり、有効か。具体的に子どもの仲間集団を捉えるにはどのような調査

方法が可能か。あるいは子ども理解の方法や概念規定の問題もここに含まれる。

ところで、子どもの仲間集団を研究していく場合には、それぞれの課題に応じて各種の調査方法を駆使していかなければならない。今のところ具体的な子どもの仲間集団を捉えるためには観察法（第一段階の観察法）が確実である。その上でさらに集団の内部構造を解明するために集団行動や相互作用を観察したり（第二段階の観察法）、あるいはメンバーに対するインタビュー（個人面接法）、ソシオメトリック・テストといった調査手法がとられねばならない。分析課題によっては質問紙法、事例研究法、生態学的方法、また特定の場面を設定しての実験法やモノグラフ的な調査研究が有効な場合もあるだろう。各種の調査方法を組み合わせての三角測量手法（triangulation）も必要かも知れない。しかしいずれも相当の時間を要するから長期的な企画が必要である。スラッシャー（Thrasher,F.M.）の『ギャング』は仲間集団研究の嚆矢といってよいが、これまでの仲間集団研究は逸脱集団を事例に進められてきたといってもよい。それというのも逸脱集団はメンバーが固定的で、集団の境界も明瞭であり、また集団活動の場所もほぼ一定で、したがって観察法による集団把握も、集団の相互作用の観察も比較的容易だからである。

子どもの仲間集団研究は調査が極めて困難な研究領域であるが、しかし研究課題に応じて調査手法を弾力的に選び、研究を漸次深化させていかなければならない。子どもの仲間集団こそが実は「子ども社会」そのものだからである。

【引用文献】

長島貞夫 1966. 『児童社会心理学』 牧書店。

Sherif,M and Sherif,C.W., 1964. Reference Groups : Exploration into Conformity and Deviation of Adolescents, Harper & Row. (= 1968 重松俊明監訳『準拠集団』黎明書房)。

Sullivan,H.S.. 1953. The Interpersonal Theory of Psychiatry, W.W.Norton & Company Inc., in New York, (= 1990 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鑪幹八郎訳『精神医学は対人関係論である』みすず書房)。

住田正樹 2000. 『子どもの仲間集団の研究（第2版）』九州大学出版会。

田中熊次郎 1975. 『新訂 児童集団心理学』明治図書。

Thrasher,F.M., 1927. The Gang : A Study of 1,313 Gangs in Chicago, The University of Chicago Press,